

若き日の志から五十年を経て

津守 眞

二〇〇二年十一月二十七日、広島大学教育学部・大学院教育学研究科より、私は思いがけず、ペスタロッチー賞を授与された。ここに掲載するのはその時に行った記念講演の全文である。

1 ペスタロッチーの名は、私が少年のころから知っていましたから、その名の付いた賞を授与されるのは、光栄であり、本当にうれしいことです。これが私の最初の感想です。

2 次に、私はこの五十年間、それぞれの時期に、私立の小さな学校、愛育養護学校を通して一緒に子どもの仕事をしてきた人たちがいます。同僚の保育者たち、非常勤、ボランティア、親たち、子どもたちです。それから私自身の家族です。皆で、よってたかつて、つくつてきた学校です。

3 第二次世界大戦の時、私は大学生で、心理学を専攻

していました。入学して間もなく、一兵卒として召集され、軍隊に行きました。日本は敗れ、大日本帝国陸軍は解体され、自由な身となって家に帰ることができました。自由を得て帰ってきた喜びは忘れません。一面焼け野原の中を駈に向かう道の脇に、夾竹桃の真っ赤な花が咲いていました。あの燃えるような赤は嘘の裏に焼き付いています。復員してきた学友たちがカーキ色の兵隊服のまま、次々に教室に戻ってきました。教室の窓ガラスは空襲で破れたままでしたが、寒風の中でも再び学問ができる喜びに意気込んでいました。私は、その中で、敗れた祖国の再建は教育にあると考えました。コメニウ

ス、ペスタロッチー、フレーベルの人間教育です。

このことを語るとき、岡部弥太郎先生の幼児教育の講義の中で、しばしば言及された広島大学の稲富栄治郎先生にふれないわけにいきません。稲富先生はコメニウスの研究者で、『広島原爆記―未来への遺言』（講談社）の記述は熱い思いなしには読めません。

4 私は大学を出てすぐに、愛育研究所で児童相談の手伝いをしていました。そのころは子どもの数が多くて、子どもたちが街にあふれていました。学校も幼稚園も二部制で、障碍のある子の行き場がありませんでした。私は、幼稚園、学校に行かない子どもたちの保育の場が求められていることを知りました。研究室の一室で、知恵おくれの子どもたちのための「特別保育室」を開きました。昭和二十四年六月です。

その最初から、障碍があつても、幼児は遊ぶことを欲していることを身をもって知りました。当時は精神薄弱と呼ばれていました。能力がないために排除されている子どもの教育は一国の文化のバロメーターではないかとの考えに、当時の先輩研究者たち、研究所のトップの人

たちも同感し、励ましてくれました。

5 今回賞を頂くことになり、何に対する賞なのかを考えたとき、それは私がやったことに対してではなく、やろうとした志に対するものだろうと思います。

6 いま述べたのは、青年期に私に起こったことです。私は生涯を二十年ごとに区切って考えます。

その次の二十年、私は、お茶の水女子大学附属幼稚園で、心理学によって、幼児教育をつくらうと考えました。もはや戦時中の偏狭な日本精神によるのではなく、科学の方法による教育を求めて模索する時期が続ききました。しかし、厳密な科学にならうとするほど目の前の子どもの求めに 대응することができなくなることを私は知りました。

7 児童相談の経験から、私は、日常生活を丁寧に見ていけば、改まって検査場面を設定しなくても、精神発達を知ることができると考え、発達診断法を作りましたが、それは学問的に可能なものですが、同時に、子どもを発達段階によって区別することの危険をも感じました。

8 私の主たる関心は、人間の成長で最も大切な、「根」にあたる幼児期の保育にありました。幼児であることにおいて、障碍があっても、なくても、違いはありません。



私は、以前は研究者と実践者とを区別して考えていました。しかし、研究者も実践者になることもあり、実践者も研究者になることもある。どちらも人間のすることです。

倉橋惣三の詩。「子どもが飛びついて来た。あつと思ふ間にもう何処かへ駆けて行ってしまった。その子の親しみを気のついた時には、もう向こうを向いている。私は果たしてあの飛びついて来た瞬間の心を、その時びつたりと受けてやったであろうか。——時は、さっきのあの時であったのである。——いつ飛びついてくるか分からない子どもたちである。『育ての心』フレール館)

どちらにも共通の、子どもの視線に立つ配慮です。保育の実践は、私の時間と労力を子どもに与えることです。倉橋惣三の「子どもが飛びついて来た時」は子ど

もとの出会いの核心をついています。

9 次の二十年、私は当時の科学からみれば非主流の学問、フロイトやユングから、また、ランゲフェルト、フェルメールなどの現象学的教育学に学びました。ランゲフェルトが言った、誰かが本気になって子どもの世話をしなかったら、子どもは育たないとの言葉を私は忘れることができせん。どの国にも、そのように考えて子どもの保育をしてきた人たちがいるのです。

10 一九八三（昭和五十八）年、養護学校が義務化されて間もなく、私はお茶の水女子大学を辞職し、愛育養護学校の校長となり、毎日を子どもと共に過ごす者となりました。

「一日、保育の現場に出ることは一冊の本を読むようなものだ。理解しながら読むこともできるし、訳の分からぬまま読みとばすこともある」。私が校長となった最初の感想です。「昨日のことで身内が熱くなりながら今日も一日を現場で過ごす」。こうなつた時、私ははっとしました。これが私が学んだことであり、以後、私はその連続線上を歩んできました。次第に自分の保育の輪郭が

はつきりしてきました。

11 保育の一日は、毎日違うし、子どもによって違います。

しかし、違う日々を貫いて、共通のことがあります。

私は毎朝、子どもと出会うことから始めます。「出会う」は身体の肌で出会い、心の肌で感じることです。

子どもの行動を内なる世界の表現と考えると発見があります。理解は知的な喜びです。表現をどう読むかは保育者にゆだねられています。理解の仕方に応じて応答の仕方は違ってきます。「困った」と否定的にとらえるか、肯定的にとらえるのかによってかわり方は違います。理解とは知識の網の目位置付けることではなくて、自分が変化することです。保育実践における子どもの理解の仕方は実証科学の方法とは違います。子どもと直接にかかわり、子どもと遊ぶことです。

私どもが将来への不安にとらわれて現在をおろそかにしたら、子どもの求めに応じてかわることができません。

保育者は少しの時間も気を抜くことを許されません。

子どもが目前から去ったあと、さし迫った現実の要求からひととき解放され、子どもと応答していた時の体感や物質のイメージなど、最初の感覚を思い起します。その省察は、個人的作業ですが、同僚と話し合うミーティングの時を欠くことができません。保育の場を共にした人たちと話し合うことにより、同じ子どもの異なった側面をも知り、子どもの全体像が見えてきます。

ミーティングによる発見です。そのとき人々の間に上下関係はありません。実習生もベテラン保育者も壮烈です。男、女、老若、人によって違った角度から見ているし、子どもは大人によって見せる顔が違います。それぞれが子どもに触れた直接体験を語り合う時、子どもの全体像が見えてきます。保育者同士、互いに話し合う時間がなくなったら、保育の質は向上しないし、子どもも成長もないでしょう。

12 実習生、ボランティアを受け入れることが自分たちの保育にプラスになります。このことは私の保育生活でいくら強調してもし過ぎることはありません。保育にかかわる人たちは皆対等です。私どもの学校では、かなり

早い時期から、複数の大人で保育するのが当然と考えていました。実習生は指導の「対象」ではなく、一緒に保育をする仲間であり、同士です。それがこの子どもたちの未来をつくるのに、図らずも大きな力になっています。

13 子どもの成長の観点から言うならば、子ども自身の存在感がしっかりしていなければ、どんなカリキュラムも意味をなしません。どんな子どもにも自分から何かをしようとする能動性があります。子どもが自分から始めることには、必ず意味があります。大人がそれに協力することによって、生活がつけられます。創造的であるとともに、社会にとって建設的な生活がつけられます。他人からやらされるのではなく、自分が選んだことを自分のペースでやることです。

互いに相手の思いに合わせてやりとりする相互性は、規則や管理による統制とは違います。民主的社会的性です。こうして人間の自我がつけられます。わがまま、利己主義とは違います。力を込めて自分で何かをする体験が未来への自信と希望をつくり出す力になります。

具体的なことは日々違います。子どもによって違いま

す。一日として同じ日はありません。

14 小さな行動に目をとめること。

子どもが私に手を触れた時の感触からその時の子どもの気持ちが変わります。親しみを感じさせる柔らかい手。立ったままで動こうとしない、不安な姿勢。砂の中に手を埋める、自分を外に出したくない、他人の目を気にしている手、などなど。

子どもの行動を心の表現としてみると、「発見」があります。保育者それぞれの発見です。私が保育者二年目、小さい子を押し倒し、髪を引っ張る子どもに悩まされた時、「暗闇で背後から肩を掴まれることが人間の恐怖の根源」であることを、ノーベル文学賞を受けたエリクス・カネッティは『群衆と権力』（岩田行一訳 法政大学出版局）の中で述べていますが、この子に対して私も同じことをしていることに気がつきました。小さい子の髪を引っ張る時、私はこの子の肩を掴んでいます。それはこの行動をますます助長するのではないか。優しい目で見られることを最も欲しているのはこの子ではないか。どうしたらこの子に優しい目を向けることができる

か。そこから私の次の保育が始まりました。

保育者それぞれの発見です。このような例を話すと限りがありません。

科学では優れた研究者が発見したことを当てはめて応用しますが、保育では一人ひとりの人が子どもにも直接触れて発見し、それに従って子どもに応答するのです。最も人間的なことです。保育者は発見の喜びと、その展開を見る楽しさがあります。それができないときは、自分にも子どもにも苦悩の時です。自分自身を根底から考え直し、自分を変えなければなりません。

15 子どもが主人公である学校。それは私が校長になって最初の大きな課題でした。一人ひとりの子どもが、こは自分の学校だと威張って過ごせる場所。そう思えなかつたら、子どもの成長はないでしょう。そう思えない時は実際にはいくらもあります。倉庫の教材を全部教室に運ぶことを主張する子。「子どものすることには意味がある」。その子に協力して一緒にそれらを運んだ時、スーパリーの店のイメージがその子にあることが分かりました。子どもが始めたことに大人がどう協力するかが問

われています。子どもは大人よりもずっと、建設的に未来を見ています。それを信頼することから教育は始まります。

16 私は、障害のある子どもは何もできないと以前は思っていました。長年つき合っているうちに、それは偏見であることが分かってきました。重い障害をもつても、自分が社会に貢献したいという高いプライドをもっています。他人から一段低く見られていると感じることが、「荒れた行動」を引き起こします。

「分かるはずはない」ことを前提にして幼児向きの易しい本を読むのではなく、精神的に高度な本を読むことが子どもに訴えることを最近になって私は何人もの子どもについて経験しています。アンデルセンの人魚姫の原文を読んで、自分が泡になってもいいという箇所で、その子は涙を浮かべました。ピノキオの続き物の本を持ってきて読むことを求めたのは激しい行動をした男の子でした。旧約聖書の柔らかい肌のヤコブが毛皮を着けて父親をだます箇所でニヤリと笑ったのは言葉を話すことをしないベッドに横になって一日を過ごす子どもでした。

イザヤ書の「主に望みをおく人は
新たな力を得、鷲のように翼を
張って上る。走っても弱ることな
く、歩いても疲れない」という箇



所を読むと目を輝かせたのは一度も歩いたことのない子
でした。

こんなことしかできないと、決めてかかつてはいけな
い。高尚な精神はこの子たちの中にもっと強くある。

高いところに輝く光を見つめるのは生後間もない赤ん
坊です。生後八か月の赤ん坊は長い棒が好きです。滑り
台の下から上を見て上がろうとするとところに、私どもは
高尚な精神の始まりを見ます。

17 アート、音楽、造形を私どもはたいせつにします。
障碍のある子どもは特に、言葉を使うことが不得意で、
音と動き、造形で表現します。アートの専門家たちが毎
週定期的に参加します。それは子どもにも職員にも大き
な力とインスピレーションを与えています。

18 もうひとつあります。現代の日本の乳幼児のことで
す。

都会の中心に住む私の周辺は、子どもがのびのびと育
つ環境ではありません。

外に出られない狭い部屋で、一日の大部分を過ごさね
ばならない子どもたちが増えています。

どの子も言いたいことがいっぱいあります。「もっと
長い時間自由に遊んでいたい」「大人はボクをおいて何
処かへ行ってしまった」「ほんとは玩具ではなくて、ボ
クを見ていてほしかったんだ」などなど。子どもには小
さな願いがいっぱいあります。

保育所設置基準を守らなくても簡易に保育所がつくら
れるようになって、幼児の環境の悪化は一層ひどくなり
ました。保育士の研修時間が減り、保育者同士が互いに
理解し合うことが困難になり、大人の管理が窮屈になっ
ています。

もちろん、環境も内容も良くやっている保育施設が数
多くあることは希望です。

19 私は六十数カ国が加盟する O M E P (世界幼児保育・
教育機構) の日本代表を長年つとめてきました。かつて
は日本の保育は世界に誇るものでした。設置基準を守ら

なくともよくなったところから、その誇りが失われつつあります。

その根源には、歴史的緊張感の中で作られた教育基本法、日本国憲法を変えようという動きがあります。

昭和二十年、敗戦の時、当時青年だった私が、六十年間抱き続けてきた、新しい時代への希望と誇りと生き甲斐が、時代の流れとともに壊されていくのを恐れます。20 幼児に出会い、しばらくの時を一緒に過ごすと、そのとらわれない新鮮な見方と、生命力に驚かされます。いつの時代にも、どんな境遇にあっても、それは幼児を保育する者にとって事実であり、深めて考えることのできる体験です。

乳幼児期こそが人間の基礎（根の部分）をつくりまします。その根から枝葉が育って、青年、壮年へとつながります。

豊かな自然、豊かな時間・空間、豊かな人間関係、高尚な精神。これらがあれば、どんな子どもも立派に育ちます。子どもたちと共に新しい世界をつくらうではありませんか。

終わりに

この子たちが大きくなったらどうなるかと質問されるでしょう。

ひとりの人、ひとつの組織がそれをすべて引き受けることを私は考えません。関心のある人が、それぞれの仕方、その子を交えて、それぞれがよいと思う考えに従って、何かをするのです。私どもの学校には週二日の青年部がありますが、多くの人は地域の作業所に行きながら、多様な活動をしています。

今日は、愛育養護学校で長く保育者として働いてきて、この三月まで校長だった岩崎禎子さん、同じく長く一緒に仕事をしてくれて、退職後は自分の家を改造して卒業生たちの活動の場をつくっている千田道子さん、それから、小さい子どものクラスで保育をしてきて常に私と共に関心を持ち続けてきた私の妻が一緒に来ていますので紹介します。

今回頂いた賞は、組織によらず多くの人たちの協力に對して頂いたものと思っています。

ありがとうございます。

(保育研究者)